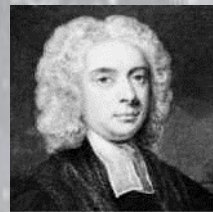


第 14 回バトラー研究会のお知らせ



今回の研究会では、木宮正裕氏（常葉大）と吉田修馬氏（上智大）による 2 つの報告があります。

日時：2022 年 1 月 23 日（日）13:30–17:30（前回同様に以前より 30 分早い開始です）

方法：Zoom 会議により開催（ホスト：松本哲人・北海道教育大・研究分担者）

・トピック（会議名）：第 14 回バトラー研究会

・ミーティング URL、ミーティング ID、パスワードは開催当日午前中にメールにて配布。

★研究会メンバー以外にも公開しますので、参加希望の方は以下にある「参加登録フォーム」に記入して
開催日前日（2022 年 1 月 22 日・土）までに送信してください。

<https://forms.gle/msDfaqf44T6kQoeG7>

（研究会終了後、メンバーによる共同論文執筆に向けての相互確認と意見交換等を行います。）

第 1 報告：

ジョゼフ・バトラーの憤慨思想と共感的社会論—18 世紀市場社会論の嚆矢としてのバトラー— 木宮正裕氏

本報告の目的は、ジョゼフ・バトラーの憤慨理論から、バトラーの社会観を明らかにすることである。バトラーの社会とは、被害者に対する第三者の共感的憤慨感情にもとづいて形成された正義をその基盤とする。共感的憤慨感情とは、被害者の悲しみに共感し、被害者とともに憤慨する感情（＝義憤）のことである。バトラーの社会とは、いわば人びとの感情の共同体なのである。しかし、バトラーの社会を基礎づける情念は、正義だけに留まらない。バトラーの社会モデルでは、同情と善意にもとづく許しによって、被害者とその共感的第三者から敵視された加害者が、社会へと再 - 包摂される。つまり、バトラーの社会は、中核としての正義が被害者を支え、周縁としての同情と善意が加害者を支えるのである。このバトラーの共感的正義にもとづく社会論は、スコットランド啓蒙思想家のケイムズ卿（ヘンリー・ヒューム）に影響を与えた可能性がある。本報告では、バトラーの共感的正義＝社会観が、18 世紀の商業社会論の展開に果たしたと想定される点を指摘すると同時に、18 世紀の商業社会論の展開という点から見た場合のバトラーの議論の限界を指摘したい。

第 2 報告：

バトラーとルソー—その倫理想と人間本性論の比較— 吉田修馬氏

ジョゼフ・バトラー（1692～1752）とジャン＝ジャック・ルソー（1712～78）は、活動した時期が異なり直接的な影響関係は無く、思想家としての立ち位置や持ち味も異なっている。バトラーは長老派の家庭に生まれ、青年期に英国国教会に改宗し、聖職者として人生を送った。ルソーはカルヴァン派として育ち、青年期にカトリックに改宗し、思想家として成功した後カルヴァン派に再改宗したが、『エミール』はパリ高等法院、ジュネーヴ政府、それにパリ大司教からも告発された。バトラー『宗教の類比』は反理神論であるが、ルソー『エミール』の宗教論は理神論的である。また、バトラーは経済的事象に肯定的であるが、ルソーは商業社会の人間に対する影響に悲観的である。さらに、バトラーの著述は慎重だが、ルソーの文章は時として情緒に訴え論争的である。

しかし、人間本性論や倫理想に関しては、バトラーとルソーとの間には問題設定や主張に興味深い共通点がある。両者ともに感覚論や経験論を受け入れ懐疑論や唯物論を退けている。また、自己愛を肯定しつつも自己愛を警戒し、良心を重視して利己主義的な人間観や道徳観を批判している。他方で、両者の議論には相違点もある。バトラーには現代の道徳心理学に類する分析的な議論があるが、ルソーにはそれが乏しい。また、自己愛や良心の内実、自己愛と良心の関係にも微妙だが看過できない違いがある。バトラーとルソーが比較されることは少ないが、両者の人間本性論や倫理想を対照させることで、それぞれの議論の特徴が明確化されるように思われる。バトラーを通じてルソーを読み解き、ルソーを通じてバトラーを読み解くことを目指したい。